

## 二溪の風

県立神奈川工業高校100周年

横浜市の元助役で、「都市未来計画株式会社」の取締役・廣瀬良一(建築38)は、入庁以来横浜の公共建築や都市づくりに関わる。特にみなどみらい21(M21)地区の開発事業では、市企画調整局長を務めた技監の田村明(故人)を裏面で支えた。田村は飛鳥田一雄市長時代、市に「六大事業」を提案して入庁し、その推進に当たった著名な都市プランナーだ。

「造船所に移転してもらい、前面の海を埋め立て、まちの基盤をつくりました。目的は、東京に依存しない名実ともに独立した都市にすること。首都機能

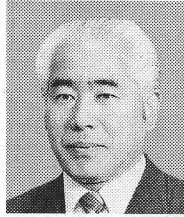
## 地域貢献

⑦

の分散という国家的事業の側面もあった」。退官後、廣瀬はM21関連の第三セクターに勤務し、みなどみらい線開業にも取り組んだ。

出身は町田市。県内の親戚宅に寄留する形で終戦の翌年、神奈川工業高校に入學した。校舎は空襲で焼失したままで、1年半ほど他校で「間借り」授業だった。

「まちづくりには苦難が山は



廣瀬 良一さん



藤木 幸夫さん

どある。諦めなかったのは神工で培った忍耐力のおかげ」。モットーは「人には誠意、自分には自信」「反省はせよ、後悔はするな」。MM21地区は今、「ミナト横浜」を代表するエリアの一つとして市民はもとより全国に親しまれている。

◇

藤木企業会長で横浜港運協会会長の藤木幸夫(機械34)が育ったのは戦争の真ただ中。国を挙げて工業が推進され、神工には秀才が集まった。

「小学校の先生に『君の成績では不可能』と言われましたが、奇跡的に合格しました」。入学して長い廊下を歩いたときは、「聖域に来たように」緊張したという。

3年生のとき横浜大空襲により目前で校舎が焼け落ちた。「学

校が燃えてしまった」と嘆く生徒に、ある先生が「学校は燃えていない、校舎が燃えたんだ」と一喝したことは忘れられない。

早稲田大学卒業後、父・藤木幸太郎の起こした、横浜港の港湾荷役会社である藤木企業に入社。高度経済成長期以降、荷役の主役が人力からコンテナへ転換すると、経済や都市計画の専門家と連携し、時代に即した横浜港のあり方を模索した。

その際、土台となったのは、神工で養った理系的思考や工業技術的な方法論だ。「かつての港湾荷役は理屈のいらぬ義理人情の世界。そんな『情』の世界で育った私は、『理』の部分が弱かった。そこを神工が補ってくれました」

ことし5月、横浜港振興協会会長にも就任。横浜の象徴ともいえる横浜港のさらなる発展のため、決意を新たにしている。

敬称略、( )内は専攻科と通算卒業期

## ミナト横浜の発展に

〈おわり〉